

「シンデレラに夢は見ない」

平木健典

登場人物表

古賀燈子（17） 高校二年生

（6）

束原護（17） 燈子のクラスメイト

遠野暁美（17） 燈子のクラスメイト

海谷樹里（17） 燈子の同級生

古賀静（39） 燈子の母

瀬戸葉子（40） 美術部顧問

古賀武雄（28） 燈子の父

校長

教師 A

社員 A

その他

○ 漫画喫茶・外観（夜）

二車線道路沿いにある大きな建物。専用の駐車場は車で埋まっている。

○ 同・個室ブース（夜）

広いデスクにリクライニングチェアが設備された室内。机には平積みされた少女漫画が無造作に置いてある。リクライニングチェアに身を預け、ストロ―でジュースを飲みながら漫画を読んでいる古賀燈子（17）。

燈子の心の声「人生は演劇のように生きるときだ、とプラトンは言った」

燈子、無表情で漫画の一ページ、女子が男子に告白しているシーンを読んでいる。

燈子の心の声「そして、恋とは深刻な病だ。

とも言っていた、らしい」

燈子、ページをめくって男女が抱き合うシーンを見つめる。

燈子の心の声「ただし」

東原の声「失礼しまーす」

燈子、焦ててコップを落としそうになる。隣りのブース扉が開く音。

東原の声「フライドポテトです」

燈子、おそろおそろブース扉を少しだけ開けて外を覗く。

外には従業員服を着た、東原護（17）が立っている。

東原「ごゆっくりどうぞ」

東原と目が合う寸前で隠れる燈子。足音を聞いてまた外を覗くと東原の後ろ姿と廊下を曲がる瞬間の横顔が見える。

燈子、ブースに戻って椅子に座るとため息をつく。

燈子の心の声「私は恋をしている。ああ恋をしている。ただし私にとってのそれは、病にも演劇にもなりはしない」

燈子、少女漫画の表紙を眺めながらジュースをストローで飲み、中身が空に

なって音を立てる。コップを軽く振って氷の音を鳴らす。

○同・廊下（夜）

燈子、コップを手に周りをキョロキョロしながら歩いてくる。曲がり道でそっと壁越しに先を覗いてから、隠れる。一度、深呼吸をしてから再び、壁越しに先を覗く。

ドリンクバーがある廊下で仕事をしている束原。

燈子、再び壁に隠れて薄らと笑う。

燈子の心の声「そう。恋は遠くから眺めるのが、ちょうどいいのである」

燈子、カラッポなコップをストローで吸う。

○タイトル「シンデレラに夢は見ない」

○稲城高校・全景

公立高校。校門は閉まっている。

○同・グラウンド

校庭の真ん中で体育着姿の男女が二人一組でストレッチをしている。そのなかにいる、燈子と遠野暁美（17）。燈子の前屈を暁美が背中を押して手伝っている。

暁美「じゃあ東原と遭遇は回避できたわけだ」

燈子「まあね」

暁美「隠れて好きな男子のバイト先に通うと見かけによらず健気で可愛いよねえ、燈子ちゃんは」

暁美、燈子の背中を強く押す。

燈子「痛い痛い」

暁美、燈子の背中を戻しながらストレッチが終わって談笑している男子のグループを見つめる。その中には東原の姿もある。

暁美「東原かー。顔は普通に良いし普通に良い奴で普通にサッカー部。中々の好物件ですな」

燈子「普通多いな。いや普通にサッカー部つてなによ」

暁美「ライバルは多いよ、普通に」

燈子「私には関係ないって。普通に」

暁美、呆れた顔で再び、燈子の背中を押す。

燈子「あぁー、痛い痛い痛いっ」

暁美「ばばあ並みの固さだねえ。心も身体も」

燈子「∴∴交代」

交代する、燈子と暁美。

暁美「で？ 私が出した宿題は？」

燈子「お勧めされた少女漫画は読み終わったよ。苦行のなにものでもなかった」

燈子、暁美の背中を押すも暁美の身体はなんなく倒れる。

燈子「柔らかっ」

暁美「本当にそれでいいの？ 片想いのまま

でいいとか、華の女子高生なのに」

燈子「近づけばストレスだって多くなるし。

変に生々しくなるでしょ。それなら遠くで見てるほうが素敵だし幸せ。劇的な恋模様より、静観する恋心を求めているのよ、私は」

暁美、身体を起こして立ち上がる。

暁美「やれやれ。もはや片想い症候群と呼ぶべきですな」

燈子「これはこれで恋の病なのか」

暁美「なにそれ」

燈子「何千年前のおっさんの話」

暁美「またわけのわからんことを。そんなんだからクラスで浮くんのだぞ」

燈子、渋い顔をする。

暁美「ほれほれ、気になる人がいるなら誰でも紹介するよお、お嬢さん。仲良くなりた
い子、いませんか？」

暁美、燈子に身を寄せてくる。

燈子、暁美を押し返しながら

燈子「余計なお世話だ。言ってるでしょ。私

は距離感を大切にしたいのよ。暁美はオーブンすぎる」

暁美「私はほら、全人類友達だから」

燈子「コミュ力お化けめ」

暁美「人の胸にはサクッと踏み込んだ方が、楽しいことがあるものよ？」

笛が鳴る音。

燈子「そうかもねー、ほら集合だ。行こ」

燈子、歩き出す。

暁美、苦笑交じりにため息をつく。

生徒たちが集まるなか、束原が燈子を目で追っている。

○同・美術室

燈子以外は誰もいない室内。机は全て後ろに下げられており、その中央でイーゼルを前に絵を描いている燈子。

微かに聞こえる運動部のかけ声やすぐ近くを通るリノリウムを叩く足音が聞こえている。

ふと開かれたままの窓からそよ風が入り込んで、カーテンが膨らむように揺らぎ、窓を見る燈子。

○（回想）古賀家・燈子の部屋

古賀武雄（28）が古賀燈子（6）に絵本を読んであげている。絵本のタイトルはシンデレラ。

燈子「お父さん、シンデレラ綺麗だね」

窓から風が入り、カーテンが膨らむように揺らぐ。

燈子と古賀は互いに笑い合う。

○元の稲城高校・美術室

窓を見つめている燈子。そよ風で膨らんだカーテンは窓に沿って戻っていく。

燈子、微笑んで

燈子「……懐かしいな」

美術室の扉が開く。入ってきたのは白衣姿の瀬戸葉子（40）。

葉子「どう？　進んでる？」

燈子、肩をすくませながら

燈子「保健室はいいの？　瀬戸先生」

葉子「少しの間なら大丈夫よ。なにかあったら連絡くるし」

葉子、首に掛けたスマホを見せる。

葉子「しかし、なんで保健教諭が顧問やってるんだろうねー」

燈子「まあいいじゃないですか。今年から私だけになっちゃいましたし」

葉子「OGとしては悲しい限りだわ」

葉子、歩み寄って燈子の絵を覗く。

燈子の絵は、北欧に似た夜の街中の景色。しかし、その街は森の中にある異世界のような絵。

燈子「どうですか？」

葉子「うん、いいんじゃない？　古賀さんら

しいモチーフが活かされてると思う。けど、街中なのに人が一人もないのね」

燈子「あー……」

葉子、近くの丸椅子に腰かけて

葉子「前から気になってたことだけど、古賀さんの絵って全部人は描かないのに気配は感じるのよね。ほらここ」

葉子、絵を指差す。

街中にある住宅の窓は明かりが灯っている表現がされている。

葉子「ここには誰かがいて、気配は感じるけど姿は見えないみたいなの。あえてよね？」

燈子、複雑な面持ちで筆とパレットを置いて

燈子「……好きじゃないんです。自分の絵に他人を描くの。なんだかすごく近くなる気がして。私、一人のほうが落ち着くから。じゃあ街を描くなって話ですけど」

葉子「ううん。それでも描きたいって思う気持ちは芸術には大事。でも、絵に他人か。面白いわね」

燈子「ダメ、ですかね？ 年末のコンクールに出すつもりなんですけど」

葉子「いいんじゃない。でもまだ時間もあるし、古賀さんにはもっと自由な絵にチャレンジしてほしいかな」

燈子「自由ですか？」

葉子「そ。今しか描けない等身大の十代を、ってね。特に古賀さんは自分をぎゅって我慢しちゃうところあるから」

燈子「自覚はないですけど」

そこで扉が勢いよく開く。

暁美「燈子、終わったー？ 一緒に帰ろ」

葉子、暁美を指差して

葉子「あのくらいの自由がちょうどいいかも」

燈子「なるほど、よくわかりました」

笑い合う、燈子と葉子。

暁美、首を傾げる。

○漫画喫茶・店前（夜）

私服姿でやってくる燈子。店に入ろうとしたところで

樹里の声「どうしてだめなのっ！」

束原の声「いや、だからさ」

燈子「この声は……」

燈子、逡巡しつつも声が聞こえた駐車場の方へと向かう。

○同・駐車場（夜）

人氣が少なく暗い駐車場。柱の陰に隠れながら様子を伺う燈子。

束原と海谷樹里（17）が話している。

束原「頼むからわかってくれよ。何度も言ってるじゃんか。付き合う気はないんだって。バイト先まで来られるのはちよつとさ」

樹里「私のこと好きじゃなくてもいいの。それでもダメ？ 私のこと嫌いなのか？」

束原「いやあ、嫌いとかでは……」

駐車場へやってきた別の客が束原と樹里を横目で見ながら去る。

燈子、様子を見ながら独り言。

燈子「へえ修羅場か。本当にモテるんだな束原って」

燈子、興味なさげな顔で去ろうとする。

東原「また今度話そうぜ、な？」

樹里「そうやってまた先送りにするんだね。」

いつもそうだから、だから私は」

東原「いや、それは悪かったけど……泣かないでくれよ」

燈子、足を止めて天を仰ぐ。

燈子の心の声「関係ない、私には関係ない」

燈子、苦悶の表情で悩んでから、踵を返す。

燈子「東原、何やってるの。もう時間でしょ」

東原と樹里、燈子を見る。

燈子の心の声「あー、私のバカ」

東原「おー。古賀。今日も来たんだな」

燈子、東原の台詞に怪訝な表情で

燈子「……まあ、ね」

樹里「古賀さんって、確か」

樹里、眉をひそめる。

燈子、東原にアイコンタクトする。

東原、燈子を見て察した顔。

東原「えっと、実は俺、古賀に告白したんだ。
この前」

それぞれ絶句する、燈子と樹里。

燈子の心の声「………は？」

樹里「………え？」

東原「クラスメイトなんだよ。ずっと前から
気になっててさ。それで好きだってこと伝
えた。答えは保留にされてるけどな」

燈子、愕然とした顔。

樹里「保留って、何？ そんなの相手に対し
て失礼だよ」

東原、申し訳ないという顔で燈子を見
つめている。

燈子、苦悶の表情で

燈子「……いきなり告られて、びっくりした
から。ノリで返事するのは違うと思ったの。
勇気いるでしょ？ 告白するのって」

樹里「それは」

樹里、言い淀む。

燈子、落ち着きがない言い方で

燈子「私としては、東原のことは……そのお、まあ、嫌いでは？　なかったし。だから待っててもらってるわけで」

樹里「……」

東原「海谷が何度も告白してきてくれてさ、俺も踏ん切りがついたんだ。だから、ごめん。海谷とは付き合えないよ」

樹里、数歩後ずさって燈子を強い目で見てから走り去って行く。

燈子、樹里を申し訳ない顔で見

燈子「……（小声で）悪いことしたな」

燈子、深くため息をついてから東原を見る。

燈子「よくもまあ、平気でポンポンと嘘が出ることね」

東原「うっ……古賀だってそうだろう」

燈子「残念。女は基本的に嘘つきなの」

東原「そっか。それなら良い……わけはないか。ごめん、嘘つかせて。あとありがとう、助かった」

燈子、肩をすくめてみせる。

燈子「あれ誰？」

東原「C組の海谷樹里」

燈子「同じ学校か」

東原「知らなかったのか？」

燈子「同じクラスでも知らない人いるんだから、他クラスなんて外国だよ」

東原「古賀らしいな」

東原、子どもっぽく笑う。

燈子、そんな東原に見とれてから意識的に顔を逸らして

燈子「まあ……私は、同じバイトの人が呼びにきたみたいな設定のつもりだったんだけどね」

東原「うわ、ごめん。初っ端間違えたわ」

燈子「いや、私も気後れしてなりきれてなかったよ。それにしても、私に告白って、謎すぎるぞ」

東原「すまん。諦めてほしい一心だった」

燈子「そんな嫌いなもの？　可愛い子じゃん」

束原「嫌いじゃないけど、そういう対象じゃないってあるだろ、古賀にも」

燈子「まあ確かに」

束原「それに告白されるのこれで、十回目くらいなんだ。いやもったか」

燈子「おお」

束原「しかもこの一ヶ月くらいでだぞ。一番最初は断ったし。さすがに、な」

燈子「うん、それはきついね」

束原「でも、これで諦めてくれるだろ」

燈子「……」

束原、スマホで時間を確認して

束原「やべ、もう時間だ。悪いな古賀、俺のことは適当にフツたことにしてくれていいから」

燈子、早く行けと手を振ってジェスチャーする。

束原、走り去るも立ち止まり振り向く。

束原「あ、でも古賀を気になってたっけのは嘘じゃないからな」

燈子「え？」

東原「今度奢らせてくれ、じゃあな」

東原、去って行く。

燈子、一人残されて

燈子「……波乱の予感」

燈子、漫画喫茶へ行こうとするも踵を返して帰って行く。

○商店街・道（夜）

古い商店街の大通りを歩いている燈子。

お店のほとんどはもう閉まっている。

大通りの脇道に入り、ひっそりとある

お店に入る燈子。看板は「スナック銀河」と書かれている。

○スナック銀河・店内（夜）

バーカウンターといくつかのテーブル席がある狭い店内。全体的に薄暗くカウターの裏の壁にはぎっしりとウイスキーなどの酒瓶が並んでいる。

カウンター内の席に座り、年季の入った絵本を読んでいる古賀静（39）。そのタイトルはシンデレラ。入ってくる燈子。

燈子「母さん、ただいま」

静「おう、おかえり。随分早いな」

燈子「行く気なくなった」

静「めずらしい。何かあったか？」

燈子「さてね。お店開けるでしょ、手伝うよ」

燈子、静が読んでいたシンデレラの絵本に気付いて。

燈子「うわ、懐かしい」

静「片付けてたら出てきてな。昔、よく読んでやったろ」

燈子「父さんにね。母さんは頼んでも一度も読んでくれませんでしたか」

静「あれ、そうだったか？」

燈子、呆れた顔で絵本を手取る。

燈子「何度も読んでもらったよ。だからかな、シンデレラには憧れた。綺麗なドレスが着

れて、素敵な王子様が迎えにくる夢物語」

静「過去系にするには早くないか？」

燈子「夢見る少女なんてとっくにいないよ。

恋人も結局は、他人なわけだしね」

静「……」

燈子「これ、二階持っていくね。汚しちゃっ

たら嫌だし」

静「ああ。仏壇にでも飾っておけ」

燈子「いいね。父さんも喜ぶ」

燈子、階段を上がっていく。

静、心配げな顔をしている。

○稲城高校・教室（朝）

登校してくる燈子。時計の針は七時半

過ぎで教室の生徒はまばら。しかし、

すでに教室にいた女子生徒何人かの視

線が燈子に向かう。

燈子、その視線に気付いている。

暁美「おっはよー。燈子ちゃん」

暁美、席に座ってニコニコしながら手

を振っている。

燈子、げんなりした表情で暁美の前の席につく。

暁美「いやー、こんな朝早く集合かけてくるとは面白いことになってるじゃん」

燈子「心当たりがあるようで」

暁美「ええ、もちろん。お声がかからなかったら私から打診してたざます。見たい？胸くそ悪くなると思うけど」

燈子「一応」

暁美、燈子にスマホ画面を見せる。

二年A組のトーク画面で「古賀は男遊びをしてる」「束原に告白されてキープしているビッチ」などと書かれている。

暁美「他にも、昔から恒例の実家の悪口が再燃してる感じね。ご感想は？」

燈子「ビッチの前にクレイジーをつけてほしかった」

暁美「ダメーτζゼロだねえ。で？どこまで

本当なの？」

暁美、頬杖をつきながら微笑む。

燈子、時計を一瞥して

燈子「十五分程度でまとめよう」

暁美「是非是非。オチも期待してるよん」

○同（朝）

時計の時刻は八時前。教室は生徒たちで賑わっている。

暁美、机を軽く叩きながら爆笑している。

暁美「それで疑似告白されちゃったんだ」

燈子「笑うなよ」

暁美「いやだってさ。それ言われてるときの

燈子の顔想像したら」

暁美、我慢できずに吹き出す。

燈子、暁美をじろつと睨む。

暁美「ごめんごめん。でもよく助けに出たじ

ゃん。距離感はどうしたの？」

燈子「昨日の自分を殺したいよ」

暁美、嬉しそうに微笑んで

暁美「でもそっかー、出所は樹里か。C組らへんからだとは思ってたけどね」

燈子「知ってる子？」

暁美「うん。ピンではないけど何度か遊んだことあるかな」

燈子「相変わらずお顔が広いことで」

暁美「恋に対して無我夢中って感じなのかな、樹里は」

燈子「何度も告白してる時点で五里霧中ですよ」

教室の離れた席で、東原がチラチラと燈子を見ている。

燈子と暁美、東原の視線に気付く。

燈子「束原ってさ……」

暁美「もち。さっきのトークルームには入ってるよ」

燈子「ですよー」

暁美「もう白状するには多勢に無勢過ぎたからほぼ既読スルー状態だね。悪気はなかった

たんだろうけど、女の世界を知らなすぎる
純粹無垢よ」

燈子「女の世界を知ってる男なんて可愛くない」

暁美「どうするの？」

燈子「どうするもなにも、振ったことにして
終わり。人の噂も七十五日ってね。私はそ
んなことよりコンクール用の絵をどうする
かの方が問題」

暁美「さすが鉄血燈子ちゃん。ねえ今日、美
術室私も行っている？ 暇なんだ」

燈子「いいけど、その代わり絵の構想の相談
乗って。もう時間ないんだ」

暁美「お任せを」

教室に教師が入ってきて前を向く燈子。
暁美、悪い笑みをしている。

○同・美術室

入ってくる、燈子と暁美。

暁美「あーあ、疲れたあ」

燈子「あんた五限、ずっと寝てたじゃん」

暁美「授業で寝ても身体は休まらんよ」

燈子「じゃあ寝るな」

暁美「だって、昼休みの後の現代文とか催眠術じゃんか」

燈子、呆れながら窓を開ける。

燈子「そろそろ、窓開けると寒くなってきたかな」

暁美「もう冬だもんね、秋ってあったって感じ。そうだ、保健室行ってくるよ。部活始める挨拶しなきゃでしょ」

燈子「私が行くよ。部員が行かないと」

暁美「そんな細かいこと葉子ちゃん気にしないで。燈子は準備してな」

暁美、スキップしながら美術室を出て行く。

燈子「テンション高いな」

燈子、首を傾げつつエプロンを着けてイーゼルに真っ白なキャンバスを立てる。隅に置いてあった自身の前回の絵

を見て

燈子「等身大の十代ねえ」

燈子、腕を組んで唸る。

扉が開かれる。

燈子「あれ暁美、早かったね」

気まずそうに入ってきたのは束原。

束原を見て固まる燈子。

束原「……よう」

○同・廊下・美術室前

暁美、楽しそうな顔で去って行く。

○同・美術室

燈子、絵筆を持っているもキャンバスを見つめるだけで絵は描いていない。

束原、ばつが悪そうに燈子から離れたところで丸椅子に座っている。

束原「ここ、静かだな」

燈子「だねー」

沈黙する一同。

束原、落ち込んだ様子で俯く。

燈子、そんな束原を一瞥して仕方ないという顔で。

燈子「私が漫喫行ってたこと知ってた？」

束原「え？」

燈子「昨日、また来たのか的なこと言ったでしょ。隠れてるつもりだったんだけど」

束原「いや、何度か見かけてたよ。プライベートルdash話しかけるのもなってるって思ってる」

燈子、ため息をつく。

束原「学校でいつか話せたらと思ってたんだ」

燈子「それで気になってたと」

束原「うん、そんなところ」

束原、一度深呼吸をしてから

束原「その、ごめんな今回は。なんかすげえ巻き込んだしまった」

燈子「いいよ。私、昔からこんな性格だし、人の悪口陰口には耐性あるから。慣れてるの」

束原「それって、実家のことでだよな？」

燈子「なんて聞いてる？」

束原「いや……」

燈子「キャバクラとか風俗店とかでしょ」

黙る、束原。

燈子「スナックね。うちシングルマザーで母さんが店やってるから。まあ水商売の宿命だよ、くくられるのは」

束原「なるほど、な」

燈子「そんな残念みたいな顔しないでよ」

束原「してないっ、してないからっ！」

吹き出すように笑う燈子。

束原も笑うが、気まずそうに

束原「今日、全部嘘だったって海谷には言っただ。でも」

燈子「信じてくれなかったか」

束原「……うん」

燈子「まあそこを信じてもらったところで、私のあらぬ家庭の噂は消えないわけだが」

束原、黙りこむ。

燈子「しかし、人生を演劇のように生きるよ

ね、あの子は。確かに恋の病は深刻だ」

東原「まさかこんなことになるなんて思わなかった。海谷も、あんな酷い噂流すなんて」

燈子「証拠はないでしょ」

東原「タイミング的にあいっだろ。ホントに
ごめん」

東原、頭を深々と下げる。

燈子、東原を一瞥して

燈子「他人の脳天なんて見たくないですよー」

東原、渋々頭を上げる。

燈子「放っておけばいいって。言いたいやつには言わせておく。本当に気にしてないから」

東原「そういうわけにはいかねえよ。俺のついた嘘で古賀を巻き込んだんだ。少なくとも俺が告白したことが嘘だったってことは海谷には信じさせる。それで流れた噂の訂正もしてもらおうよ」

燈子「そしたら、また海谷さんからの告白リ
ピートが始まっちゃうよ？」

束原「いまは古賀のことが優先だ」

束原、深刻な顔で俯く。

燈子、悩むように逡巡してから

燈子「……なら一つ妥協案があります」

束原「何かあるのかっ！」

燈子「付き合ったことに、すれば？」

束原「え？」

燈子「私と、束原が」

束原、啞然と燈子を見つめている。

燈子、少し焦った口調で

燈子「振りっ、振りだからね。流れた噂はも

う消せないし、仮に私が束原を振ればまた

海谷さんは言い寄ってくる。なら逆に私と

……その、恋人になっちゃえば海谷さんは

諦めざるを得ないし、加えて評判最悪の私

と付き合えば束原も良くは思われないかも

だから、私への罪悪感も少しは晴れるんじ

やないか、という提案。私はどうでもいい

んだけど、それで束原の気が済むなら、ア

リかなってね」

沈黙する、一同。

燈子、沈黙に耐えかねて

燈子「いや、やっぱりこれはないか。忘れて」

東原「いいな、それ」

燈子「ええ？」

東原「ああ、それしかねえよ」

燈子「……我ながら、何を言ってるのかって

思っただけ」

東原「あ、そうか。古賀は嫌だよな。すまん」

燈子「いやそういうわけじゃなくてね」

燈子、額に手を当てる。

燈子「そっちこそいいの？ 私がいうのもな

んだけど、東原の評判は地に落ちるかもよ」

東原「そんなの全然。それで俺のこと嫌うや

つは友達じゃなかったってことだろ。古賀

からしたら遠野がそうじゃん、あいつ古賀

のために俺をここに呼んでくれたんだぜ」

燈子「余計なことをしておってからに」

東原「羨ましいよ、そういう関係」

燈子、微笑んでみせる東原を見つめて

から真っ白なキャンバスを見る。

東原「じゃあ今日からよろしく、でいいか？
一緒に帰るとかな」

燈子、キャンバスを見つめながら

燈子「ほとぼり冷めるまでの期間限定ね。それ以上のことはしないから。手も繋がない。
デートもしない」

東原「おう、了解」

燈子「ただ、もう一つ条件つけていい？」

東原「いいよ。俺に出来ることなら」

燈子「絵の、モデルになってくれない？」

東原、驚いた顔。

○同・廊下・美術室前

樹里、ドア窓から美術室の中を覗いている。中では燈子と東原が話している。やってくる、暁美。

暁美「樹ゆう里っ、何やってんの？」

樹里、ビクツと驚いて

樹里「あ、遠野さん」

暁美「久しぶりじゃん。前田たちとカラオケ行って以来だね。元気だった？」

樹里「うん……元気」

暁美「そう、よかった」

樹里、言いづらそうに

樹里「遠野さんって、古賀さんと仲良かった

よね」

暁美「まあね。親友っていうと小っ恥ずかしいけど。どうかした？」

樹里、気まずそうに顔を逸らす。

暁美、樹里の両肩を軽く叩いて

暁美「悩みあったらいつでも相談してよ。クラス違うから話せることもあるべ。愚痴でもなんでもどんとこい。口の堅さはお墨付きです」

暁美、唇をチャックする動作。

樹里、泣きそうな顔になって

樹里「……ありがと。私、帰るね」

暁美「うん、またねー」

樹里、足早に去って行く。

暁美、樹里の姿を見つめて

暁美「悪い子ではないんだけどなー」

暁美、ため息をつきながらドア窓から絵を描いている燈子とモデルになっている束原を見つめる。

○同・美術室

向かい合っている燈子と束原。

燈子、キャンバスに向かって、時折束原を見ながら絵を描いている。

束原「なんか、美術女子って感じだな」

燈子「学校で唯一のね。肖像画じゃないから楽にできていいよ。イメージが欲しいだけなの」

束原「へえ、やっぱり美術女子だ」

沈黙する一同。

燈子の絵筆で描く音がよく響く静寂。

束原、座っている椅子を傾けたりしながら窓を見つめている。時折そよ風が入り、束原の髪を揺らす。

燈子、絵筆の手を止めて東原をじっと見つめている。

ふと東原と目が合って、燈子はすぐにキャンバスに視線を戻す。

東原「一つ聞いてもいいか？ 疑似恋人中だし」

燈子「どうぞ。紳士的なものなら」

東原「古賀の母ちゃんがやってる店って、どんなところなんだ？」

燈子「んー多分、東原が素直にイメージするところと大差ないと思うよ。お店の二階が家でね、子どもの頃からの遊び場だった」

東原「へえ、なんか楽しそうだな」

燈子「元々は喫茶店が夢だったんだって。でも父さんが病気で死んじゃってからスナックにしたって聞いた。お酒の方が儲かるからね。いつだったかとっても親切な親戚のおばさんが教えてくれたよ。だから、燈子ちゃんの良い子にしなきゃだめよって」

東原、複雑な顔で

束原「それは、なんつーか」

燈子、苦笑してみせる。

燈子「六歳とかそのくらいに父さんが病気で入院して、母さんは一度もお見舞いに連れて行ってくれなかったの。多分相当悪かったからだろうね。私も行きたいとは言わなかったんだ。すぐに帰ってくるって疑ってたのは、入院するときの、いってきます、いってらっしゃいの会話だった」

束原「……辛いな」

燈子「うん。でもね、悲しかったけどそれ以上、人って簡単にいなくなるんだなって思ったんだ。それがどんなに親しい人でも。だから私は、他人との距離感を保っていたい。SNSだってやらないし、好きな人の隣りにも立ちたくない。どうしても、人命の儚さが目についちゃうから」

束原「じゃあ遠野のことは？」

燈子「あれは長い付き合いだし、いまじゃ家

族みたいなものだから」

束原「じゃあ、古賀と友達になるには頑張らないとだな。疑似恋人からスタートだけど」

束原、子どもっぽく笑う。

燈子、そんな束原を見て微笑む。

燈子「せいぜい頑張って」

束原「おう。見てろよ」

笑い合う、一同。

燈子、描く手を止めて束原を盗み見る。

燈子の心の声「こんな彼だから、私は好きになっただろうな」

○スナック銀河（夕）

カウンター内で静が酒を飲みながら、
カウンター席では暁美がパスタを食べ
ている。

静「そんなことになってるのか」

暁美「ええ。燈子のことだから静観しようつ
て言ってるか、妥協案で付き合った振りを
しようとか言ってるかも。束原の罪悪感を

和らげるために、とか」

静「後者だろうな」

暁美「ですなー」

静「あいつには申し訳ないな。この商売はもうも受け入れられない奴らがいる」

暁美「それ謝ったりしたら、燈子怒りますよ」

静、苦笑して酒を飲む。

静「で？　暁美はそれでいいのか？」

暁美「何がですか？」

暁美と静、見つめ合ってから

暁美「……敵わないなあ、なんでもお見通し？」

静「ガキの頃から見えてくるからな」

暁美、フォークでパスタをくるくると

巻きながら

暁美「燈子が好きな人とくつつくならそれが一番良いですよ。私も将来は男と結婚するし、親にもなりたい。でも、一番好きなのは燈子ですね。これは一生変わらない」

静「そこまで娘を大切にされると、母親の立

つ瀬がないな」

暁美「もちろん、燈子ママのことも大切です
よ。私のお母さんみたいなものですから」

静「ありがとよ。しかし、それだけ気持ちが
あるなら、あいつの一番になりたいとは思
わないのか？」

暁美「私の気持ちはライクでもラブでもなく、
アフエクシヨンですから。そばにいられる
なら何でもいいですよ。それが幸せ。ゆえ
に燈子のためならなんでもする所存ですぜ、
私は」

静「どっちが親かわからんね。ちゃんと自分
も大事にしろよ。お前の悪いクセだぞ」

暁美「わかってますよ。いつだって私は私ら
しく生きてますから。あーあ、この至福を
燈子にも味わってもらいたんだけどな」

静「人という幸せか。陰しいだろうな」

暁美「ですす」

静「一杯飲むか？ お茶だが」

暁美「いただきますしよう」

暁美、笑みを浮かべながら何かを考えている表情。

○稲城高校・全景（朝）

多くの生徒が登校してきている。

○同・教室（朝）

入ってくる、燈子。

教室は騒然としており、燈子の席に人が集まっている。

燈子「ん？」

燈子に注目が集まる。

燈子、早足で席に行くと机には黒ペンで「風俗嬢」や「泥棒女」、「死ね」などど落書きされている。

燈子「こりゃ、すごいな」

暁美、教室に入ってくる。

暁美「おっはよー。燈子。どうしー」

暁美、燈子の机を見て絶句する。

暁美「ちよいちよい、ここまでされるのなに

げに初じゃない？　さすがに温厚暁美ちゃんでもキレそうだそ」

燈子「いやもう顔キレてるよ。悪いけど、消すの手伝ってくれない？　束原には見られたくない」

暁美「あんたねえ。どこまで」

束原が登校してくる。

暁美、束原に気付いて大声で

暁美「まさかここまで陰湿とはねー」

燈子「ちよつと、暁美っ」

束原、騒動に気付いて走り寄ってくる。

束原「なんだよ……これ」

暁美「なんだよじゃないよ、束原あ。誰のせ

いだと思ってるの？」

燈子「やめてよ、暁美。どうしたの？」

暁美「キレてるって言ったじゃん。さすがに私も看過できないって。まさかここまでやるとは、女の嫉妬は怖いなー」

束原、拳を握り絞めて教室を出て行く。

燈子「束原っ！」

燈子、暁美を強い目で見つめる。

暁美、そっぽ向く。

燈子、束原を追って教室を出る。

○同・教室（朝）

束原、真剣な表情でC組の教室入り口へやってくる、教室でひとり本を読んでいる樹里に歩み寄る。

樹里、束原に気付いて笑顔で

樹里「あ、束原く」

束原「（遮って）お前、楽しいのかよ？」

樹里「……え？」

束原、怒鳴り声で

束原「楽しいかって聞いてんだよっ！」

騒然とする教室。

やってくる、燈子。

燈子「束原っ！」

黙って怯えている、樹里。

燈子、歩み寄って

燈子「束原やめて。らしくないでしょ」

束原「……好かれて、嫌な気持ちになる男はいねえよ。でももう限界だ。机に落書きして、噂流して何の意味があるんだよ」

樹里「ら、落書き？　なんのこと？」

燈子、樹里を怪訝に見つめる。

束原「お前、マジでいい加減にしろよ」

束原、樹里の胸ぐらを掴みかかろうとするも、寸前で燈子に止められる。

燈子「束原」

束原「でもよっ」

燈子、束原をじっと見つめる

束原、何か言いかけるも黙る。

樹里、二人を悔しそうな顔で見つ

樹里「……何よ。束原くんが悪いんだよ。急

にこの人に告白して付き合い始めたとか。

私はずっと、ずっと前から好きだって言っ

てたのにっ！　私は、私は」

樹里、燈子を睨んでから顔を覆って泣

き始める。

涙を流す樹里を見つめる、燈子。

燈子「……やっぱり、間違ってた」

東原「え？」

燈子の心の声「人を傷つけて、自分を傷つけて、こんなに真っ直ぐな恋をしているこの子に対して、私がしたことは」

燈子「私だけが舞台に立ってない。登場人物にすらなれてなかったんだ」

東原「古賀？ 何言ってる……」

燈子「海谷さん、私達付き合っていないから。告白されてもいない。全部嘘だよ」

樹里「……え？」

燈子「ごめんね、最初の嘘からあなたを傷つけちゃってた。恋人の振りをしようって提案したのは私だから。でも、どうして東原が私に告白したなんて嘘をつこうと思ったのかも考えてあげて。ちゃんと、話し合ってね」

燈子、東原に苦笑してから教室を出る。

○同・教室前（朝）

教室から出てくる燈子。

教室前で立っている暁美。

何も言わず、並んで歩き始める燈子と
暁美。

暁美「放っておけばいいのに、クソ真面目な
んだから。束原と樹里、付き合っちゃうか
もよ？」

燈子「関係ない。最初から言ってるでしょ。」

私はこれでいい」

暁美「さいですか」

燈子「机、消すの手伝ってね」

暁美「はいはい」

笑い合う、燈子と暁美。

○同・全景（夕）

校内の木々には葉がついておらず、
寒々しい景色。コートを着た生徒が寒
そうにしながら歩いている。

○同・美術室（夕）

キャンバスに向かい、絵を描いている

燈子。その隣に座っている、暁美。

暁美「もうほとんど完成だね、これ」

燈子「うん、けっこう時間かかった。」

締め切りギリギリ」

暁美「十二月でしょ？　あと一ヶ月近くある

じゃん」

燈子「乾かす時間とかもあるから」

暁美「あー、なるほど」

暁美、椅子を燈子の真後ろに動かして
座り、燈子と背中合わせになって寄り
かかる。

燈子「ちょっと。重いぞ」

暁美「束原と樹里、別れたらしいよ」

燈子、筆を一瞬止めてまた描き始める。

沈黙する一同。ストーブの音がコトコ

トと鳴っている。

暁美「結局一ヶ月くらいかな。束原から振つ
たってさ」

燈子「よく知ってるな」

暁美「樹里とはあれからちよいちよい連絡と
るようになったんだ」

燈子「へえ、なんで？」

暁美「んー？　なんとなく」

燈子「……」

燈子、描く手を止めずに

燈子「ねえ暁美」

暁美「ん？」

燈子「あの日、机に落書きしたのあんたでし
よ？」

暁美、微笑んで

暁美「どうして？」

燈子「東原に問い詰められたとき、海谷さん、
落書きのことは初耳みたいな顔してた。マ
ジックも水性の使われてたし、そこまで接
点がなかった海谷さんといま繋がりがあ
るならって。あとは」

暁美「あとは？」

燈子「あんたなら、私のためにやりそうだか

らかな。親友だしね、一応」

暁美、嬉しそうにはにかんで

暁美「燈子には、恋をしてほしかったの」

燈子「してたよ」

暁美「その恋の先だよ。人の心に踏み込む一歩。ほんのつま先を入れるだけでもいいから、その先にあるものを見てほしかったんだ。偽物の恋人なんかじゃない本物の恋心ってやつをね。あのままじゃ、あんたら進展しなそうだったしさ」

燈子「海谷さんが可哀想だったんじゃない？」

暁美「悪者上等。疑似恋人からの脱却には樹里は邪魔だったからねえ。そのあとのプランも色々考えてたんだけど、初手で失敗しちゃった。燈子、身引いちゃうんだもん」

燈子「最初から、当事者じゃなかっただけだよ。私は」

暁美、寂しく苦笑する。

暁美「ちなみに、樹里には全部話して謝ってるよ。まあ親友の悪い噂流したことの報復

でもあったし仲裁和解してる」

燈子「そりゃよかった」

暁美「ごめんね」

燈子「いいよ。ありがと」

暁美「束原のことはいまでも？」

燈子「好きだよ」

暁美「愛だねえ」

暁美、燈子の背中に強く寄りかかって

暁美「ねえ燈子。嘘でも、たった一日二日で

も。好きな人と一番近くで過ごした時間は、
楽しくなかった？」

燈子「……」

暁美「この幸せを、知ってほしいんだけどな
あ」

燈子、暁美の背中を押し返す。

暁美、負けじと押し返す。

笑い合う、燈子と暁美。

引き戸が開きやってくる、葉子。

葉子「まだいたの？ そろそろ下校時刻にな
るから帰りなさい」

葉子、燈子の絵を見て

葉子「いいじゃない。もう完成ね」

燈子「はい、手続きお願いします」

葉子「わかった」

燈子、絵筆を置いて絵を見つめる。

絵は草原と雲の間を走る男子がこちらに向かつて手を差し出している様子が描かれている。男子の顔は光が描写されて見えなくなっている。

葉子「ちなみにこれって、好きな人？」

燈子「さあ、どうでしょうね」

燈子と暁美、顔を合わせて微笑む。

○スナック銀河（夕）

T・三月

制服姿で帰ってくる燈子。

静「おお、ようやく帰ってきた」

燈子「ただいま。どうしたの？」

静「スマホ持たせておけばよかったって初めて後悔したよ。ビッグニュースだ」

燈子「何それ。妊娠した？」

静「アホか。もっとすごいことだ」

燈子、首を傾げる。

○稲城高校・体育館（朝）

全校生徒が整列している体育館。

壇上で校長が話している。

教師たちが並ぶ列に立っている燈子。

隣りには葉子が立っている。

葉子「緊張してる？」

燈子「……そうですね。でも正直、入賞した

って言われてもあんまり実感ないです」

葉子「古賀さんの中の伝えたいものが伝わっ

たのよ。誇っていいわ」

燈子「ですかね」

燈子、何か悩むような顔。

葉子「古賀さん、等身大よ」

燈子「え？」

葉子「伝えたいことを表現する自由な十代を」

葉子、燈子にウインクしてみせる。

教師 A 「次に授賞式です。二年 A 組の古賀燈子さん。どうぞ壇上に」

燈子、生徒たちの拍手のなか、舞台へと歩くも階段の前で止まる。

燈子「……伝えたいこと」

拍手する生徒たち中、階段のステップを見つめる燈子。

○（フラッシュ）同・美術室

絵を描いている燈子とその向かいに座っている束原。笑って話している。

○元の稲城高校・体育館（朝）

階段を一段上がる燈子。一度止まって足下を見つめる。

燈子の心の声「シンデレラに夢を見ていた。いつか魔法使いがやってきて、綺麗なドレスを着させてくれて、王子様と出会って最後には迎えにきてくれる。待っていれば、いつか来てくれると信じていた少女時代」

○（回想）古賀家・玄関（朝）

家を出て行く古賀。

見送っている幼い燈子。

古賀「行ってきました」

燈子「行ってらっしゃい」

扉が閉まり、一人佇む燈子。

○元の稲城高校・体育館（朝）

また階段を一つ上がる燈子。

燈子の心の声「でも、あの日を境に怖くなつた。世の中は美しいだけではないと思ひ知らされたみたいで。だから、私は」

○（回想）稲城高校・美術室（夕）

背中を合わせて話している燈子と暁美。

暁美「嘘でも、たった一日二日でも、好きな人と近くで過ごした時間は、楽しくなかった？」

○元の稲城高校・体育館（朝）

燈子、また一段階段を上がる。もう一歩で舞台へと上がる。

燈子、舞台を見つめて微笑む。

燈子「……楽しかったよ」

燈子の心の声「世の中はシンデレラのように、待っているだけの美しい物語じゃない。恋は深刻な病だから。本当に好きなら、夢を見たままでは終われない。向き合わずにはられない。自分から動き出さなきゃ始まらない」

燈子、一步を踏み出して舞台へと上がり、壇上まで歩く。

校長「おめでとうございます」

燈子、賞状を礼儀正しく受け取ってから促されてマイクスタンドの前に立つ。

燈子「ありがとうございます。えっと、私はずっと人を描くのが苦手で、今回は初めて描きました。モデルの人が、いたんですけど……」

燈子の心の声「人生を演劇のように生きるの
は自分だ。私はいつの間にか、人生の舞台
に――」

燈子、生徒の列の中を見つめ束原を見
つける。目が合う燈子と束原。

燈子、微笑んで

燈子「その人は私の……私の、好きな人でし
た。心から、恋をしている相手です。そん
な私の初めての気持ちだが、評価されたのか
もしれません」

見つめ合う、燈子と束原。

ざわつき、誰の事だと歓声上がる体
育館内。

燈子、はっとして舞台袖へ逃げるよう
に去る。

生徒の列の中で、暁美が嬉しそうに笑
っている。

教師陣の中にいた葉子が、安心するよ
うに微笑んでいる。

葉子「古賀さんの等身大の恋、かな」

○同・美術室（朝）

一人、椅子に座ってぼーっとしている、
燈子。

引き戸が開き束原がやってくる。

燈子「うわ、なんで？」

束原「そんな引くなよ。遠野がここでサボってるだろうからって」

燈子「……あいつ」

束原「いいのか朝からサボって。俺もだけど」

燈子「こちとらもう学校辞めたいくらいです
からね」

束原、椅子に座る。

沈黙する、燈子と束原。

束原「静かだな」

燈子「だねー」

また沈黙する、燈子と束原。

燈子&束原「あの」

同時に喋り、吹き出して笑う一同。

燈子「モデルしてくれない？　もう一回。また描きたくなっちゃって」

束原「さすが美術女子。いいよ。何度でも」

燈子「何度でも？」

束原「何度でも」

笑い合う、燈子と束原。

燈子「束原は？ 何言おうとしたの」

束原「同じ。もう一回描いてくれて」

燈子の心の声「ああ、認めざるを得ない」

束原、照れながら手を差し出す。

燈子、束原の手を同じく照れながら握り返す。

燈子の心の声「恋の病はどうしようもなく、深刻だ」

【了】